

# ゴラン高原におけるドルーズ派コミュニティの 生活空間とゆらぎ 境界に生きる人々

川口奈穂\* , 三好恵真子\*\*

## 1. はじめに

本研究は、ゴラン高原に生きるイスラーム少数派の一派であるドルーズ派<sup>(1)</sup>に焦点を当てている。

ドルーズ派の歴史に造形が深い宇野 [ 1996 ] によれば、中東世界において「血縁関係を通じた部族・氏族の連帯感」を意味するアラビア語の「アサビーヤ」という言葉があり、これは、家族から部族、氏族と大きな集団になっていくと血縁関係は徐々に薄れていくが、その場合実際の血縁関係よりも、お互いに同じ祖先を持っているという共通認識がその集団の結束を強固なものにするとされる。

他方、ドルーズ派は歴史上、政治的事情によって改宗者を受け入れてきた一面があり、必ずしも同一の血族集団であるわけではない。そして明らかに複数の部族や氏族から成り立っている集団の場合、アサビーヤという観念だけで集団がまとまるのは難しく、その集団が存続するためにはアサビーヤを超える統合イデオロギーが必要となり、それが宗教儀礼や宗教施

---

\* 大阪大学・人間科学研究科 MC

\*\* 大阪大学・人間科学研究科

設などの宗教イデオロギーになっているのだという。したがって、ドルーズ派は同宗派内での結婚しか認めない血縁関係の集団という閉鎖的な性格を持っているものの、実際には様々な改宗者を受け入れているため、集団の維持装置としてのドルーズ派の教義がアサビーヤを補完するものとして形成されてきたと考えられる〔宇野, 1996〕。そこで本研究では、この宗教イデオロギーによって成り立っているドルーズ派の共同体を「コミュニティ」として捉えることをまず言及しておきたい。

ところでゴラン高原は、1967年の第三次中東戦以降、イスラエルが国際法を違反し占領しているシリアの国土の一部であり、地理的には北にレバノン、西にイスラエル（実質的に併合されているためイスラエルからはパスポートなしで入ることができる）、南にヨルダンの3つの国境と、東はシリアとイスラエルの停戦監視の境界で区切られた場所にある（図1、写真1）。現在は、ドルーズ派の村が4村とアラウィー派の村1村が残るのみ



で、そこに住むドルーズは、農業を生業として生活している。イスラエルの占領下に入った後も、ゴラン高原のドルーズたちのほとんどがイスラエル国籍の取得を拒否し、その多くが今も無国籍状態となっている。しかし近年になって、半世紀近くにもわたる占領状態の長期化により、イスラエル国内での労働の増加や、イスラエル国内の他のドルーズ派のコミュニティとの繋がりを持ち始めている。

図1（内閣府-国際平和協力本部事務局（PKO）：[http://www.pko.go.jp/pko\\_j/result/golan/golan02.html](http://www.pko.go.jp/pko_j/result/golan/golan02.html), 2014年12月10日最終閲覧）



(写真1) マジュダル・シャムス村の分離フェンス

ゴラン高原のドルーズ派は、地理的、宗教的、政治的な境界に生きてい  
ると考えられる。地理的境界とは、ゴラン高原が地理的にアラブ諸国とイ  
スラエルの境界線に当たり、シリアにとってもイスラエルにとっても国家  
戦略のために重要な地域であるということである。また後述するが、貴重  
な水資源の確保という意味でも重要な地域である。そして宗教的には、独  
自の教義を持つことで他との差別化を図り、自分たちのコミュニティの結  
束を強固なものにして生き延びてきたため、時には他宗派を弾圧し、多数  
派のスニ派から異端と見なされることもあった。よってドルーズ派は宗  
教的な境界にも立たされてきた少数派なのである。また政治的境界とは、  
オスマン帝国支配下やイギリスやフランスの旧委任統治時代には、自治を  
確立しようとしてきた歴史を持っており、これは自分たちの生活を守るた  
め政治的な独立性を極力保とうとしてきた理由からである。こうした宗教  
的および政治的な境界によって、イスラエルからは「アラブ陣営」切り崩  
しのターゲットとして目をつけられ、他のアラブ人たちと切り離されてき  
た。

本研究では、このような境界に生きているゴラン高原のドルーズ派コミ  
ュニティに着目し、該当する4つの村(マジュダル・シャムス村、マスア  
ダ村、ブカアサ村、アイン・クニヤ村)の全てにおいて調査を行った(写  
真2)。具体的には、1967年以降の被占領地という特殊なステータスが彼  
らに与えた変化とはどういったものであるか、また占領の長期化による影  
響や2011年から始まったシリア内戦による影響等を、文献調査を踏まえなが  
らフィールドワークによってより詳細を明らかにすることを目的とした。



(写真2) マジュダル・シャムス村の住居群

## 2. ドルーズ派およびゴラン高原の歴史と概要

### 1) 中東世界におけるドルーズ派の歴史

宇野 [1996] によれば、ドルーズ派は 11 世紀初頭にエジプトのファーティマ朝カリフであったハーキムを神格化したことにより、同朝の主流であったイスラーム・シーア派の一派、イスマイル派から分派した宗派である。しかし、その成立直後から同朝による激しい弾圧を受けたため、ドルーズ派は拠点をシャーム地方<sup>(2)</sup>へと移し、山岳地帯にコミュニティを築いた。ドルーズ派は、1042 年に伝道師バハッディーンが「ヒクマット・シャリーファ」と呼ばれる書簡を完成させてからは、布教活動を辞め、新たな帰依者の受け入れを禁止し、外部に完全に教えを閉ざしてしまう。オスマン帝国が成立し、1516 年にはシャーム地方を支配下に置くようになると、オスマン帝国はドルーズ派のコミュニティの内政に干渉しつつも、基本的に税金を納めることで彼らの自治は保たれていた。しかし、オスマン帝国の弱体化に伴い、同コ

コミュニティ内の有力家族が自分たちの支配権力を拡大し始めると、内部における部族同士の対立による権力闘争が始まる。その結果、現在のレバノンにあるシューフ地方、シリアのスウェイダー州にあるジャバル・ホーラーン地方、イスラエル北部のガリラヤ地方に点在していたコミュニティ間での住民の移動が激しくなり、現在ではシリアのジャバル・ホーラーン地方のドルーズ派コミュニティがシャーム地方におけるドルーズ派最大のコミュニティとなった。その後、オスマン帝国がヨーロッパ列強によって解体され、イギリスはトランスヨルダンとパレスチナ（現在のヨルダン・イスラエル・パレスチナ自治区）を、フランスはレバノンとシリアを分割委任統治するようになった。

1920年以降、イギリスの委任統治下に置かれてきたパレスチナのドルーズ派は、オスマン帝国下においてスンニ派と対峙してきた歴史があり、オスマン帝国が解体されイスラエルの委任統治下でユダヤ人の入植が始まって以来、1929年に初めてエルサレムでアラブ人とユダヤ人の衝突が起きた「嘆きの壁」事件<sup>(3)</sup>においても、パレスチナのドルーズ派はアラブ側、ユダヤ人側のどちらにもつかず、中立的な立場を取った。1948年にイスラエルが建国されてからも、イスラエル国籍を取得する道を選び、また1956年にはドルーズ派青年がイスラエル兵として徴兵されることに応じるなど、イスラエルに忠誠的な態度を示すようになった。その結果、1967年にはイスラエル政府はドルーズ派をアラブ局から切り離し、内務省の管理下に置き、イスラエル人と同等の権利を与えるようになった [ Nisan, 2010 ]

一方、1920年以降シリアのドルーズ派コミュニティはフランスの委任統治下に置かれたが、1925年には、ジャバル・ドルーズ地方においてスルターン・アトラシュ率いるドルーズ派が反仏抗争を開始した。これがシリア全土に広まった結果、1946年には国家として完全独立、ドルーズ派も一時的に政権に組み込まれた。しかし、1953年にはシシャクリ政権によるドルーズ派への弾圧が始まり、1966年にはアラウィー派の軍部によるクーデターの勃発、その後ドルーズ派党員は一挙に政界から追放され、シリア国内でのドルーズ派の政治的権限は弱まってしまった [ 宇野, 1996 ]

以上のように、パレスチナ・イスラエル、そしてシリアにおけるドルーズ派コミュニティの歴史の変遷から見てくる事柄は、ドルーズ派が中東史のなかでバランスをとって生きてきたということ、そして自分たちを「ドルーズ」と「イスラエル人」、「ドルーズ」と「シリア人」というように、それぞれ異なるアイデンティティとを結びつけてきたのである。

## 2) ゴラン高原ドルーズ派の歴史と概要

ゴラン高原は、シリア・アラブ共和国の南西部に位置し、大きさは 1850 km<sup>2</sup>、海拔 2880m の標高に達する山々に囲まれており、水資源が豊富である [ The Arab Association for Development, 1993 ]。1920 年以降、シャーム地方のドルーズ派コミュニティは、フランスとイギリスによる分割統治から国境線が引かれ、ゴラン高原はシリアの領土の一部として、フランスの委任統治下に置かれていた。フランスとイギリスが委任統治を終了し、1948 年にイスラエルが建国されると、アラブ諸国とイスラエルの間で大きな戦闘が繰り広げられ、ゴラン高原は 1967 年の第三次中東戦争をきっかけにイスラエルに占領され、現在に至るまで二国間の緊張状態が続いている地域である。1974 年にはイスラエルとシリアによる兵力引き離し協定への合意によって、国連の兵力引き離し監視軍 (UNDOF) が設立され、今も境界の停戦監視が行われている [ 内閣府 ]。1967 年以前、ゴラン高原には 139 村と 61 の農場が存在し、13 万人のシリア人が生活していたが、戦争直後残った村はドルーズ派の村 4 村を含む 6 村のみで、人口はわずか 6396 人しか残っていなかったという [ The Arab Association for Development, 1993 ]。1981 年には、イスラエル政府は国際法に違反しているにも関わらずゴラン高原を一方的に併合し、ゴラン高原のドルーズ派にイスラエル国籍を与えようとしたが、多数のドルーズ教徒はゼネストを行いイスラエル政府の要求を拒否した [ 宇野, 1993 ]。その結果、無国籍となった彼らのなかには、婚姻などのためシリアに移る者もいるが、その場合故郷へは戻って来られない。

以上、先行研究による分析からゴラン高原におけるドルーズ派コミュニティの占領の歴史を辿ってきたが、事項以降は現地調査に基づいてゴラン高原の実態について言及する。

### 3. 現地調査から見えてくるゴラン高原ドルーズ派コミュニティ

ここでは、2013年9月に行った事前調査と、2014年の8・9月に行った本調査の結果を踏まえ考察してゆく。

#### 1) 現地調査から見えるドルーズ派コミュニティの生活空間

水資源が重宝される中東において、ゴラン高原は水源として非常に重要な地域の一つである [Conal, 2007]。村の高台からは、レバノンとシリアの間にあるヘルモン山（アラビア語ではジャバル・シェイフ）が見え、ヘルモン山から東に60kmのシリアの首都ダマスカスまで、また西に地中海に位置するハイファ湾が見渡せ、イスラエルにとって対アラブ戦略上非常に重要な地域であることが伺える [Inbar, 2011]。また今年8月末にはシリアとイスラエルの停戦ラインの中央に位置するクネイトラ検問所が、シリア反体制派の支配下に置かれるなど、現在のシリア情勢の影響も強く受けている（写真3）。



（写真3）マスアダ村の若者が撮影したクネイトラ（境界近くの地名）の様子

他方、ゴラン高原における主産業は、その豊富な水源を活かした農業であり、特にリンゴが有名である（写真4）。農協が出資し建設した巨大なリンゴ貯蔵庫（写真5）では、村の人々が性別や年に関係なく黙々と仕事に取り

組んでいた。貯蔵庫の屋上には太陽光発電が設置され、これも村人たちが共同出資してつくったものだという（写真6）。貯蔵庫に導入されている機械もヨーロッパから輸入された高性能の機械ばかりであり、30 を超える農家が共同して出資したとはいえ、かなり貯蔵庫内の機械類は充実している点は注目に値する。この貯蔵庫は、イスラエル占領下において農家の人々がリンゴの価格が低下しすぎないようにコントロールするためにつくられたものであり、彼らの地道な抵抗の一つの象徴となっている。しかし、イスラエルに占領されてからは、警察や消防署、学校などの設備をイスラエル政府が管理し、また経済的にもイスラエル貨幣やイスラエルの物資を使った生活をしているため、依存している部分があるのは否定できない実態もある。



（写真4）マスアダ村のリンゴ農園



（写真5）マスアダ村のリンゴ貯蔵庫





(写真6) リンゴ貯蔵庫屋上にある太陽光発電機

また、コミュニティの中では、占領下において無国籍となっても、教育という手段でコミュニティの発展を支えようとしてきた姿が見えてきた。例えば、1967年の戦後にナショナリズム運動をしていた77歳の男性は、イスラエル政府に直接子供たちへの教育の許可をもらったという。「私はパレスチナの学生に（イスラエルが）留学許可を出したとニュースで聞いたとき、ゴランの人たちはまだ海外で留学していなかった。村の人に相談し、みんなでイスラエルに学生が海外で勉強できるようにお願いし、そういうこともできるようになった。（中略）そのおかげで今は少なくとも1000人以上の大学卒業生がいる。」こうした人々の地道な努力により、現在の若者たちは、イスラエル国内の大学だけでなく、シリアやロシアなどの大学にも通えるようになっている。それは彼らが武器という手段ではなく、教育という手段を使って自分たちのコミュニティを存続させる道を選んできたためだと考えられる。

しかし、現在シリア内戦の悪化によって、一部のドルーズたちの間では、今後コミュニティとシリアの関係が薄れていくのではないかと不安視する声が挙がっている。シリアへ学生を送る手配をしている男性は、「危険な状態だ。シリアに留学する機会がなくなる危険が高い。今後シリアに行く学生が全くなくなる可能性もある。」と、心境を語っていた。

## 2) 語りから表明される揺れ動くアイデンティティ

著者は2013年4月頃、大阪大学のイスラエル人の女子留学生と話す機会があったのだが、ドルーズについて研究していると話すと、「ドルーズ派は良い人たち」という答えが返ってきた。これは、ドルーズ派がいかにイスラエルにおいて他のアラブ人とは異なる存在として扱われ、一般の人にまで浸透しているのだということの一面を伺わせる出来事である。イスラエルによるアラブからのドルーズ派の切り離し政策は、パレスチナ自治区におけるイスラエル人の入植活動と比べると正反対である。すなわち、パレスチナ自治区において、彼らはイスラエルと自治区との間に巨大な壁を築き、ガザ地区は封鎖、ヨルダン川西岸へは入植を進め、アラブ人を追い出そうとする政策を取っているのに対し、ドルーズ派に関しては、イスラエル国籍の取得を促し、イスラエル国内での移動の自由を認め、また国内の大学への入学を許可し、経済活動も自由に行えるよう、取り込み政策を行っているのである。

このような経験を踏まえた上で、本調査に赴いたのであるが、ゴラン高原のドルーズ派コミュニティは、「ドルーズ」「シリア人」「イスラエル人」というアイデンティティの違いが、1967年以前の記憶を持つ老年層、1980年代以降に生まれた若年層、またイスラエル国籍を持っている一部の人々の間で大きく別れていることが明らかとなった。

まず1967年以前の記憶を持つ老年層は、シリアに住んでいた経験があり、なかには1946年の独立を経験した人々もいる。そのため、シリアに対する思い入れが強く、シリア・ナショナリズムの影響を強く受けている傾向にある。77歳の男性は、「私はシリア人、死ぬまでシリア人。そのせいで4回逮捕されたことがある。イスラエルは2000年以上離れているのにパレスチナことを覚えている、なのに私は出身であるシリアのことを覚えているのは許されないのだろうか。」と感情を言葉に託した。

次に、1980年代以降に生まれた若年層は、さらに二分化する傾向が見られた。すなわち、シリアへ留学した経験のある若者と、イスラエル国内やその他の国へ留学した若者の間で、「シリア人」であるという認識に著しい差異が見られた。シリアに留学した経験のある男性は、「私の心の中にゴラン

はシリアの一つだと彫られている。いつかシリアに戻って、簡単に行き来ができるようになると思っている。私はシリアのダマスカスに留学したので、シリアのことは大変好きになった。残念ながらゴランに帰ってしまったが、いつかシリアに戻ると思っている。」と語った。他方で、イスラエル国内に進学した女性は「私はシリアに生まれなかったし、シリアに行ったこともない。自分の国だと感じていない。私が安心する場所は私の国になる。私はシリア人だと思ってイスラエル国籍を取らなければ、私の人生は終わりでしょう。イスラエルはみんな自由に生活できるし、仕事もできる。年をとって仕事を辞めても給料が出る。(中略)また自分の命は高いと感じている。イスラエルはシリアとは違う。」と、シリアに留学した学生とは異なる意見を呈していた。

最後にイスラエル国籍を持った一部の人々であるが、これは1981年のイスラエルによる併合を受けて、教師など仕事をするためにイスラエル国籍を取得する人もいれば、イスラエル国内のガリラヤ地方から嫁いできたためにイスラエル国籍を持っている場合もある。イスラエルでは母方が国籍を持つ場合、その子供たちも自動的に国籍を取得する。そのため、近年では仕事や婚姻のために、イスラエル国籍を持つ者も増えてきているという。イスラエル国籍を持つ女性は次のように述べる。「イスラエルの国籍を持つと、仕事のチャンスが増える。」「イスラエルのシステムは良いと思う。」「イスラエルは保育支援もしてくれるし、健康保険だって出してくれる。」このように、イスラエル国籍を持っている人は、明らかに自分たちが国籍を持っていることで得をしていることを認識している。また、女性は続けて、「私はどこの出身かと聞かれれば、ゴラン高原と答える。私はシリアに生まれたわけではないし、アイデンティティはそこにはない。」と語った。

#### 4. おわりに

先行研究と現地調査の結果を合わせて導かれた事柄は、ドルーズ派コミュニティは、中東世界において、自分たちの宗派の繋がりを保つ生存戦略とし

て、外部の状況の変化に柔軟に対応しながら、巧みに生き延びてきたという特徴が浮かび上がってきた。そしてゴラン高原のドルーズ派コミュニティの場合、それがシリア・ナショナリズムと相まったために、被占領地で無国籍となって生きるという道を選ぶ結果となった。困難な道であるにも関わらず、その大多数がイスラエル国籍を取らないという選択をし、農協やNGOを立ち上げ、コミュニティの医療や教育に貢献してきたことは、非暴力の抵抗運動の事例として敬意を表したい。

しかしその一方で、占領の長期化の影響、また教育の向上によって大学まで進めるようになった若者の考え方の変化、さらにはシリア内戦の影響などが錯綜し、ゆらぎを生じていることも明らかとなった。したがって、シリアへの想いをいかに継承し、後世に伝えていくかは、コミュニティが今後どのような立場をとっていかにも関わってくると考えられる。コミュニティがイスラエル寄りになればなるほど、彼らはコミュニティの方向性を見失っていく可能性もあるのである。中東世界の平和を考えるうえで、今後も引き続きゴラン高原のドルーズ派コミュニティに注目し、見守ってゆきたい。

## 注

- (1) 本稿では、この宗派および、宗派に属する人々を、特に宗教的共同体であるという側面に注目するとき、「ドルーズ派」と称す。またドルーズ派を扱う文献の中には、「ドルーズ教徒」と表記するものも少なくないが、本稿では、このドルーズ派が、イスラエルにとってイスラームの分派としてではなく民族として扱われることや、個々の信心深さによってドルーズ派の一員であるかどうかが決まるわけではないという点を踏まえ、より抽象的なドルーズ派に属する個人の呼び方として「ドルーズ」と表記している。
- (2) シャーム地方とは、歴史的シリアや大シリアとも呼ばれ、現在のシリア、レバノン、ヨルダン、イスラエルの一部の地域を含む地域を指している。
- (3) 「嘆きの壁」事件とは、1929年にエルサレム市内のユダヤ人聖地「嘆きの壁」ないしムスリム聖地「ハラーム・シャリーフ」において、パレスチナ人とシオニストが初めて衝突した事件である。

## 参考文献

- Inbar, Efraim(2011), Israeli Control of the Golan Heights: High Strategic and Moral Ground for Israel, The Begin-Sadat Center for Strategic Studies Bar-Ilan University, Israel, September 2011.
- Nisan, Mordechai(2010), The Druze in Israel: Questions of Identity, Citizenship, and Patriotism, *The Middle East Journal*, vol.64, no.4, Autumn 2010.
- Ulqhart, Conal, The Golan Tinder Box, *Middle East*, July 2007, 26-28.
- Central Bureau of Statics, *The Druze Population of Israel*, Jerusalem, 21 April 2005.
- 宇野昌樹(1996), 『イスラーム・ドルーズ派』, 第三書館.
- 宇野昌樹(1993), 「シリア被占領地ゴラン高原-その過去・現在-」, 現代中東研究, No.13, 1993.8.
- The Arab Association for Development(1993), *TWENTY FIVE YEARS OF ISRAELI OCCUPATION OF THE SYRIAN GOLAN HEIGHTS*, Majdal Shams: Jerusalem.